

# SNS と若者のコミュニケーション能力の関係

1170387

高知工科大学 マネジメント学部

## 1. 概要

ツイッターや facebook、インスタグラムなど、スマートフォンの普及につれて SNS は身近なものとなり、若者の間では SNS は会話の手段となっている。特に中学生や高校生の間では SNS をこまめにチェックしていないと会話についていけない、や仲間外れにされる等脅迫めいた感情を抱かかせている。また、SNS の多くでは短文投稿で、話し言葉を主に使用しているためか、言葉の会話となった (face to face の会話) 際、礼儀やマナーを踏まえて他者と円滑なコミュニケーションを取ることが苦手な若者が増加していると言われている。

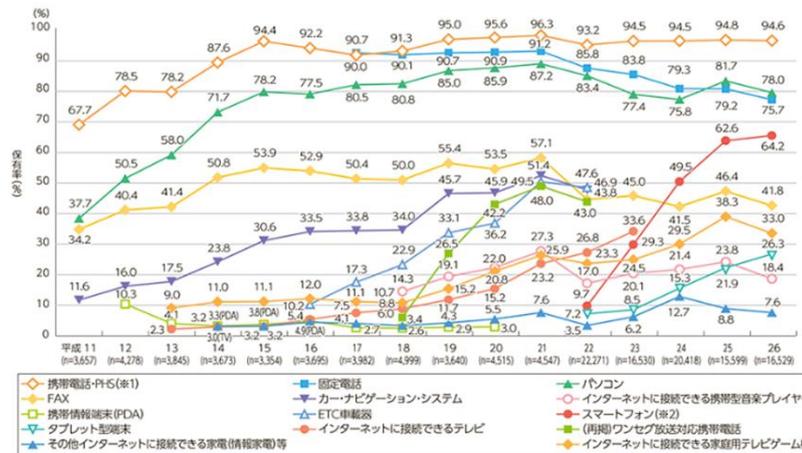
このような事例は本当に SNS の普及と関係があるのだろうか。

SNS の使用や依存によって、使用する本人にどのような影響を与えているのか調査し、適切な SNS の使用方法を検討したい。

## 2. 背景

内閣府が発表した消費者動向調査によると、2015 年度のスマートフォン (すまほ) の世帯当たりの普及率が従来型携帯電話 (ガラケー) をうわまったとしている (2016 年 3 月時点)。また、スマートフォンは登場した平成 22 年から平成 26 年の 4 年間で世帯保有率が約 55% 増加し、平成 26 年度の保有率は 6 割越えと急速に普及している。

図表7-2-1-1 情報通信端末の世帯保有率の推移



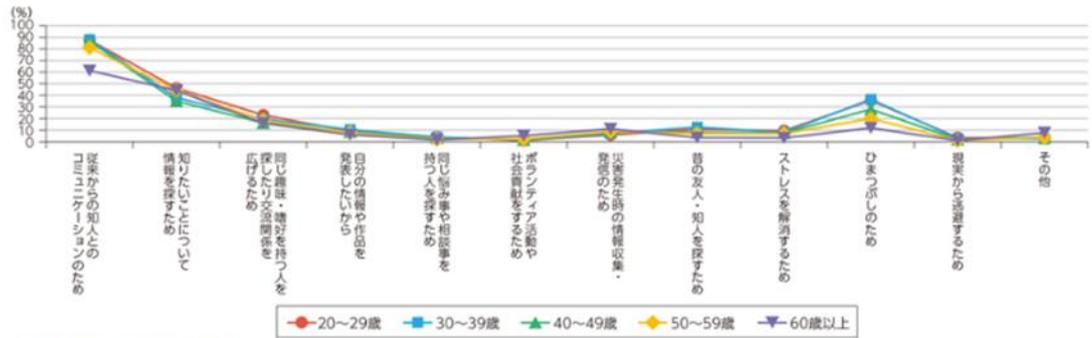
大きい画像はこちら

(出典)総務省「平成26年通信利用動向調査」

また、インターネットの利用目的は「電子メールの送受信」「ソーシャルメディアの利用」「動画投稿・共有サイトの利用」などが多く、スマートフォンの普及によりこういったことがより手軽にできることから利用が広まったと考えられる。

特に、「ソーシャルメディアの利用」はスマートフォンの普及により若者の間でも広まり、成人の間では知人とのコミュニケーションツールとして身近なものになっている。(下図参照)

図表7-2-1-7 ソーシャルメディアの利用目的(成人)



[大きい画像はこちら](#)

(出典)総務省「平成26年通信利用動向調査」

上記の結果より、「若者はソーシャルメディアをつかって主なコミュニケーションを取っているため、face to face のコミュニケーション能力が低下している」といわれるようになったと推測する。

### 3. 調査方法 文献調査

・総務省 HP 平成27年度版情報通信白書  
特集テーマ「ICTの過去・現在・未来」

「第3部 基本データと政策動向」より、  
「第2節 ICTサービスの利用動向」

・「大学新入生の友人関係における FTF および SNS コミュニケーション」

黒川, 雅幸; 吉武, 久美; 中山, 真; 三島, 浩路; 大西, 彩子; 吉田, 俊和

『対人社会心理学研究』(2015)、15~62 頁に掲載

・「大学新入生の友人関係における FTF および SNS コミュニケーション」

黒川, 雅幸; 吉武, 久美; 中山, 真; 三島, 浩路; 大西, 彩子; 吉田, 俊和

『対人社会心理学研究』(2015)、15~62 頁に掲載

・「高校生のネット逃避」

大野志郎

『情報通信学会誌』(2016) 1~10 頁

### 4. 文献内容

#### ①「大学新入生の友人関係における FTF および SNS コミュニケーション」

黒川, 雅幸; 吉武, 久美; 中山, 真; 三島, 浩路; 大西, 彩子; 吉田, 俊和

『対人社会心理学研究』(2015)、15~62 頁に掲載

大学新入生の友人関係における対面 (FTF) やソーシャル・ネットワーキング・サービス (SNS) を使用したコミュニケーションについて、縦断的に検討することが目的であった。同じ専攻に所属する大学 1 年生 64 名 (男性 21 名、女性 43 名) を対象に、5 月、7 月、10 月、12 月の計 4 回質問紙調査を実施した。分析の結果、4 時点において、友人・知人数、FTF および SNS コミュニケーション頻度は変化がなく、FTF および SNS コミュニケーション・ネットワークは 4 時点のいずれにおいても類似していた。5 月から 7 月と、5 月から 12 月の SNS コミュニケーション・ネットワークの変化は FTF よりも大きかった。5 月からの FTF コミュニケーション頻度の増加が 7 月における友人関係満足感を予測し、10 月からの友人・知人の人数の増加や FTF コミュニケーション頻度の増加が 12

月の友人関係満足感を予測する結果が得られた。

②「SNSによる大学生のコミュニケーションについて～自己隠蔽度が人間関係に及ぼす影響～」

中田美喜子

『広島女学院大学国際教養学部紀要 第2号』  
(2015.3) 27～33頁掲載

SNSによる自己隠蔽度と人間関係との影響度にかんする調査。学生は交友関係において「評価過敏・傷つき回避」「関わり苦手意識」をもち、また人間関係が円滑にいくことを優先するために、自分の気持ちや考えを伝えることを避ける「自己隠蔽」の傾向が強いと示された。これらの傾向が強い学生はポジティブな意見およびネガティブな意見をSNSやブログへの書き込みが少なく、身近な友人の人数も少ないことが認められた。さらにSNSやブログへの書き込みについても、注意深く中々書き込みを行わない方向にあることが示唆された。自己隠蔽度の低い群においては、楽しいことや趣味についての書き込みは高い群と同様に行い、さらに落ち込んでいることについても、「少し書き込む」という回答で有意差があることから、自己隠蔽度が低いほど、SNSやブログなどへの書き込みを行う傾向が示された。

研究方法は広島県内の大学生581名(男性171名、女性410名、平均年齢18.9歳)を対象に、質問紙による調査を、2014年7月から10月に実施した。

アンケートの内容は、性別、年齢、パソコンの使用頻度、携帯電話の使用頻度、友人関係について、パソコンを用いたコミュニケーションツールの利用頻度、SNSとブログを別々の項目を設けた。また、SNSブログの利用については自己開示につながる項

目として坂本(2010)と同等の項目を設定した。携帯電話を用いたコミュニケーションツールの利用事項については、SNS、ブログとは別に回答を求めた。自己隠蔽については、日本語版自己隠蔽尺度(河野、1998,2001)をもとに作成した。この論文では、自己隠蔽についてのみ分析検討したものを報告している。

結果：自己隠蔽の項目ごとの平均値を示したものが表1である。それぞれの質問項目に対して、当てはまらないから、当てはまるまで5段階で回答を行った結果である。全体平均では、3以上の特典項目として「自分について人に話してないことがたくさんある」「隠しておきたいことを知られてしまうことがこわいと思うことがある」「自分の秘密を話しても、良いことはほとんどないから、できるだけ話さないようにしようと思う」が認められた。のほかの項目は2.5以上2.9以下の得点であった。特に偏差値の小さな項目については、ほとんどの学生がそのように感じている項目であるといえるため、気を付ける必要があると考える。自己隠蔽の得点を集計し、平均値から自己隠蔽度の高い群と低い群に被験者を分けて分析を行った。パソコンの利用、「1日のパソコンの使用時間」「1日のパソコンメールの平均数」「1日の異なる人とのパソコンメールをやり取り人数」「1日の携帯電話の使用時間」「1日の携帯メールの平均数」「1日の異なる人との携帯メールをやり取り人数」の項目において分析した結果、1日のパソコン利用の時間のみ有意差が認められた。

自己隠蔽項目	平均値	標準偏差
誰にも打ち明けられない重要な秘密を持っている	2.9	4.2
自分の秘密はあまりに嫌なもので、他人には話せない	2.9	4.2

もし友達に自分の秘密を話したら、友達は私のことを切らいになると思う	2.6	4.2
自分について人に話していないことがたくさんある	3.2	4.2
親友にも話せないことがある	2.9	4.2
自分を苦しめる秘密を持っている	2.6	4.2
何か悪いことが起こった時も人には話さないほうだ	2.9	4.2
隠しておきたいこととお知られてしまうことが怖いと思うことがある	3.2	1.3
自分の秘密を話しても、いいことはほとんどないから出来るだけはなさないようにしようと思う	3.1	1.2
自分の秘密について聞かれたときは嘘をつこうと思う	2.8	1.2
図文地震について人に打ち明けられないような否定的な考えを持っている	2.7	1.2
自分のことを人に話すことに抵抗を感じる	2.6	1.1
人に話しても自分の苦しみはわかってもらえないと思う	2.7	1.2

結果を図1に示した。特にコンピュータの利用について今回の結果は利用時間が少ない結果になっている。これは10月の最初にアンケートを実施したものと7月のもので1年生が多く、コンピュータによる課題提出などが多数ある7月と講義の開始で課題の少ない10月でも違いがでる可能性があったため、アンケート調査の日程にも気を付ける必要があると思われた。

これらの結果から、SNSに書き込む内容は、楽しいことや趣味について記載していくことが多いことが認められ、自己隠蔽の低い群では「個人的に落ち込んでしまうこと」なども「少し話す」という回答が自己隠蔽の高い群に比較して有意に多いことから、自己隠蔽の低い群では落ち込んでしまうことも書き込みを行っていく可能性もあることを示している。SNSへの書き込みについては、情報倫理などの科目でいろいろな犯罪に巻き込まれる可能性や、使い方について知識をもっているため、書き込みの内容については、気を付けて書いている可能性が高いと思われる。

本研究では、自己隠蔽についての分析を検討したが、アンケートにある自己開示についても同様に分析検討していくことで、大学生が新しいコミュニケーションをどのように考えて対応しているかについての報告が可能となると思われる。

### ③「高校生のネット逃避」

大野志郎

『情報通信学会誌』(2016) 1~10頁

憂鬱な気分やストレスからの逃避を目的としてWEBを利用する「ネット逃避」が、特に青少年に増えている。抑うつがネット逃避と潜在的ネット依存傾向へ、ネット逃避が潜在的ネット依存傾向とネット使用の実害へ、潜在手系ネット依存傾向がネット使用の実害へ影響することが分かった。

本研究では、抑うつからネット逃避へ、ネット逃避から潜在的ネット依存傾向へ、そしてネット使用の実害へと至る、逃避型インターネット依存仮説モデル(Figure 1)の検証を行う。また、ネット逃避が、直接的に実害に作用する経路、抑うつが直接的に実害や潜在的ネット依存傾向に作用する経路のパスの有意性を検証し、必要に応じて仮説モデルの修正を行う。

20項目のインターネット依存関連項目のうち、日常生活における社会的役割の放棄、健康上の問題、人間関係の悪化などの実害が生じていると考えられる4項目(Table 3:H1-H4)に加え、別途設けたインターネット使用による実害に関連する5つの項目(Table 3:H5-H9)をまとめ、9項目の、ネット使用の実害関連項目とした。

分析方法:統計解析ソフトにIBM SPSS Statistics

Version22、IBM SPSS Amos Version 22 を用いた。分析1では、抑うつ、ネット逃避、潜在的ネット依存傾向、実害に対する共分散構造分析を実施した。分析2では、年齢、学年、長時間使用サービス別にグループ分けを行い、分析1のモデルを検証するために、多母集団の同時分析を実施した。すべての分析において、有意水準を5%に設定した。

結果：潜在的ネット依存傾向は、ネット使用の実害と強く結びついているため、実害を避けるためには、ネット逃避や抑うつの高まりを認識した段階で対策を行うことが望ましい。適切な気分管理やストレスマネジメントを行うなどの対処戦略を身に付けることで、ネット逃避の機会を減少させ、実害に至るリスクを大きく軽減させることが可能であることを、本研究は示唆している。また、ネット逃避は抑うつなどの心理的ストレス要因と強く関連していると考えられるため、生活環境や心理的状況を注視し、可能な限り、根本的な問題の解決を試みるべきである。

以上の資料から、若者の間でSNSは新しい環境でコミュニティを深めるツールとして利用されており、コミュニケーション全般になり替わっているのではなく、コミュニケーションの第一歩として利用されている。深い仲になるにはまだまだface to faceが重要な役割を担っていることが分かった。